

学生の声

人生のターニングポイント

工学研究科 電子工学専攻 野田研究室 博士後期課程3年 坂田 諒一

これまでの人生におけるターニングポイントはいつだったろうか。私の場合、幾つか思い浮かぶが、博士課程の進学”先”を決めた時は間違いなくその中の1つだろう。私は修士課程までは理学部の物理系の研究室に所属していたが、博士課程から工学研究科の野田研に移籍することにしたのだ。理由としては、実験設備が整っており、デバイスの作製を含んだより幅広い研究が行えるというのが大きかった。また大まかには研究分野も近い。博士課程で研究室を移るケースは稀で、大変そうだと思うかもしれないが、実際、たいへん苦労も多かった。とはいえ、すっかり初心に戻って新たな研究を始めるのは純粋に楽しく、修士までの経験のお陰で、強くてニューゲームをしているような気分もあった。現在野田研で、面発光型フォトニック結晶レーザーにおいて、フォトニック結晶に変調を導入することで斜め方向にビームを出射させ、アレイ化することで非機械式なビーム走査を実現する研究を私は行っている。

さて、他にも何回かターニングポイントはあったように思えるが、最も意外性に富んでいるのは、小学6年生の時に指の骨を折ってしまったことだと思う。指を怪我した状態で中学に入学した私は、運動系の部活への入部を見送り、やや消去法的に文化系の情報科学部なる部活に入った。情報科学部は明確な目標がなく良い意味でゆるい部活であったが、顧問が理科の先生だったこともあり、夏休みの自由研究では、理科室やそこにある器具を使って実験することができた。中学3年の夏にした自由研究の実験(ウィルバーフォース振り子とブラックバーン振り子に関する実験)が兎に角面白く、それがきっかけで私は研究者を志すようになった。それで、SSH指定校であった高校に進学し、そこはかたなく研究者になれる京大理学部(実際になれるとは言っていない)に進学した訳である。

そう思うと、人間、今の自分があるのは自らの選択による必然だと思いがちだしそう思いたいものだが、運によって左右される部分は、なかなか大きいのではないかと思う。あなたにとってのターニングポイントはいつだったろうか。ふと立ち止まって考えてみると何か面白い発見があるかもしれない。

他研究室との交流がもたらしてくれたもの

工学研究科 生存圏研究所 篠原研究室 博士後期課程3年 兒島 清志朗

これまでの研究生活を振り返ると、普段から他研究室の学生と交流することが多い生活だったと思う。私が所属する篠原研究室は宇治キャンパスにあり、同キャンパス内の小嶋研究室と大村研究室を含めた3研究室の学生は同じ部屋で研究生活を過ごしている。この点は他の電気系の研究室とは異なる部分だと思う。3研究室の関わりは日常的にあり、単純に考えると普通の研究室と比べて研究室の知り合いが3倍いることになる。このような環境は多くの点で私の研究生活を支え、刺激や彩りをもたらしている。

私の専門は高周波回路やアンテナであるが、宇宙放射線環境の解析や宇宙プラズマ観測用回路の開発など様々な分野の研究に取り組んでいる学生が周囲にいるため、学生間で話をしていると、それぞれの研究内容について話すことが頻繁にある。単純に知的好奇心をくすぐられるだけでなく、自分の研究に活用できそうな様々な視点に気づかされることもあり、刺激を受けることが多い。他にも、他研究室との交流により研究生活において精神的に助けられている部分も多い。博士課程に進むと修士課程までとは異なり、同期は少なく学年が上がるにつれ自身の研究室で果たす役割が大きくなるため、気軽に相談できる人はそれほど周囲に多くない。幸いにも私の場合は、自身の所属研究室の先輩、同期だけでなく、大村研、小嶋研究室の博士課程の先輩にも気軽に相談できる環境だった。そのため、研究でなかなか思い通りの結果が得られず行き詰まり、精神的に辛いときや解決策を悩んでいるときに、相談することで助けられたことは多い。相手が専門外であるからこそ、客観的な視点から自分と同じ分野の人とは異なる貴重なアドバイスをもらえることもある。また、互いの研究の詳しい内容まではわからなくても、共に学位取得を目指す者同士励ましあえる環境は非常に心強いものだ。

このような環境のおかげで、これまで充実した研究生活を送ることができていると感じている。博士課程の研究は一人で黙々と取り組み思い悩むことが多いが、だからこそ様々な人と日常的に話し合うことの重要性を実感した。残りの研究生活において、周りで思い悩んでいる後輩を気遣える余裕を持ちつつ、学位取得に向けて邁進したい。